

担当者コメント<編集後記>

1991年の第1回大会から足かけ26年。25回記念大会まで、あっという間に過ぎ去った四半世紀。

端からみるとこの事業は、毎年同じことの繰り返しのように見えるかもしれません、このLIVEKIDSは生き物のように毎年違う顔を見せてきました。この報告書を作成する中、過去の大会を思い起こしながら、その時に起きたことや感激、悔しさ、関わった人、仲間の顔、いろいろなことが鮮明に想いだされ、作業時間より余韻に浸る時間の方が多かったように思います。

最初はセンターに音楽スタジオがあるということで、バンドブームに乗っかり、発案者役員の一言がきっかけでスタートした事業。素人が企画するイベントは、なかなか集客もできず、結果が出なければ取りやめというときに、ボランティアスタッフの運営が始まり、ダンスが若者カルチャーのブームとなり部門を新設、いつかは京都会館のメインホールでの開催を目指していましたが、生まれ変わったロームシアターのオープニング事業として25回大会を終えることができました。

この25年間は試行錯誤の連続、~時代の流れ、ニーズの変化~にどう答えていくか。スタート当初は来場者もまばらでしたが、10年目にして1,000名を超え、バンドブームの再来、ダンスブームもあって、開催ごとに出場の応募も増え、25回大会まで4,282組、21,208名の応募をいただきました。出演者のニーズは、発表の場を求めていた時代から自分たちの評価の場へ、プロ志向の中、メジャーデビューを夢見て、京都会館のステージ演奏に魅力を感じていた時代から、自分たちの音楽を楽しみながら、ライブハウスのような場所での活動へとニーズも変わり、コンテストよりフェスティバル的要素が求められてきているようです。ダンスにおいても同様の傾向が見られたと思います。

また、この事業はボランティアスタッフが企画、運営に参画し、活動の中で自主性・協調性・自立性を養うことを目的として進めていくことに大きな意味があったと思います。当時のボランティア活動は、福祉、国際交流、野外活動などの分野は多かったものの、青少年にとって参加しやすく親しみやすい音楽やダンスの企画は少なく、説明会を開くと100名近い若者が集まりました。スタッフは、高校生から社会人。普段関わりの少ない異世代の集団が、同じ目標に向かい、対等に協議や議論をしていくプロセスは、学校や職場の日常にはない貴重な体験でした。プロの制作関係者、関わる大人と一緒に、プロもボランティアも立場は関係なく、チームの一員としてそれぞれの役割を担い、チームとしての目標を達成する、厳しさの中にもやりがいもあり、達成感を感じる体験ができたと思います。

スタッフとして参加することの目的やスタッフ個人の抱える問題も多様で、単純にイベントに関わりたい、音楽・ダンスが好き、将来就きたい仕事につくためにといった目的、思考がはっきりしていた時代から、活動を通じて自分を変えたい・成長したい、自分を認めてもらおう、必要とされている居場所を求める等、ニーズも変化してきました。その時々の変化、ニーズの変化に充分応えられたとは思いませんが、25年継続できたことは、それぞれの関わりの中で、成果があったのではと思っています。

現在、多様な選択肢の中から、自分の役割や生き方を自由に選べる時代ですが、体験や出会いの少なさから選択の幅を狭めているのかもしれません。バンド、ダンス、ボランティア、こういった活動、機会を通して、課題を乗り越える力、生きていく力、自分の将来像を描ける力を身につけ、社会の一員として地域参加を果たし、積極的に社会に働きかける人材として育っていくような事業がまたできる事を願っています。

最後に、このLIVEKIDSに関わった延べ1,146名のボランティアスタッフのみんな、出演者、当日お越しいただいた来場者の皆さん、ありがとうございました。

そして長年この事業をそれぞれの立場で支えていただいた制作関係者の皆さんには、感謝の意に堪えません。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。また、若者と一緒に“TEAM LIVEKIDS”で、一緒できることを楽しみにしています。

(公財) 京都市ユースサービス協会 理事・参与
京都市下京青少年活動センター 所長
小嶋 薫(ユースワーカー)

私は2008年5月より当協会で働きだしました。それまで約5年企業勤めをしていたため、これまでと大きく違う環境に驚きなかなか慣れない中、初年度から高校生年代がフリーペーパーを作るボランティアグループ運営や、中央(当時中京)青少年活動センターでの新たな「居場所づくり」を経験し、入ったばかりの私の意見や想いもチームとして受けとめられ、先輩方にたくさん協力をいただきながらも、試行錯誤を繰り返していました。その頃から、定期ミーティング日外で何度も集まり作業をするLIVE KIDSのスタッフと話をしたり、また先輩たちの動きを見る中で、LIVE KIDSに関心を持ち「2年目(来年度)には関わりたいな」と思っていました。その理由は、30名以上の個の交わりがチームとなって共有の目標を達成する(イベントの成功)、言葉では簡単ですが、そのプロセスでスタッフの数だけいやそれ以上に葛藤があることが想像できたからです。私は学生時代の大勢の団体活動で、また企業勤めの時も、任されチームを意識することがあって「良いチームをつくれた」という自信に結びつかなかった経験もあり、ユースワークはチーム形成にどのように働きかけるのか、ということに関心がありました。その後入職2年目にLIVE KIDSに携わり(副担当)、3年目に主担当、LIVE KIDSにはトータル8年間携わりました(第20回~25回記念大会)。私にとって多くの想い出があるだけでなく、自分自身が葛藤する経験を経て、またそれを省察する機会を大事する協会の文化もあいまって、自分の変化・成長に繋がった事業です。

私にとって最も印象に残る「葛藤」は、初めて携わった年にありました。先述したように大人数のチーム形成に自信がなかった私は、「グループ運営におけるユースワークのあり方とは?」を常に模索していました。この当時ととんでもない出来事がありました。初めて担当することになったLIVE KIDSは、いろんな方々との関わりがあり、関わる大人の真剣な想いがヒシヒシ伝わっていました。また、継続スタッフたちの「これまでチームで創り上げてきた」熱い想い、出演者として関わる若者たちの想いも重なり、この事業を運営することに非常に責任感を感じていました。また、未だ経験が浅い私にとって、先に起こる細かいコトも分からず(今思うと想像力が足りていなかった)うまくボランティアスタッフのコーディネートも出来ないと更に自信をなくしました。イベントを創りあげる上で、制作関係者との期日も多い中、スタッフは毎日来れないが事務局(私の元)に情報が集まる焦りもあり、1人で抱えてやってしまう事が多くなりました。そのことへスタッフから多く意見を貰う出来事がありました。自分の中では、物事を早く進めるために良かれと思って行なったことに対して、「スタッフに託し、チームで話し考えることに意味がある」等真剣に伝えてくれるスタッフたちが居て、「チーム」としての意識をスタッフたちから学びました。これまでの自分の価値観から変化をしなければならないと痛感した機会でした。変わらぬきや変わろうと自分自身が思えたのは、言いくらいを伝えてくれるほど、若者主体であることに遣り甲斐を持って「チームで1つになる」ことを大切にしてきたスタッフたちの熱い想いがあったからです。

それから私は「信頼し任せること」が自分の中での大切なスタンスとなっています。出来ていない時もありますが、若者たちとの関わりの中でも活けています。ユースワーカーは場をつくり、時折調整はするのですが、その場をキッカケに若者たちがいろんなことを生み出しています。今はそんな場での出来事を楽しみながら、1人1人と全体と関わる余裕をもつことが出来ています。今思うと、スタッフが想いを私に発言してくれて、私が気付くことが出来たのは、若者の声を形にする場づくりをこれまで先輩たちがされてきたからだと、尊敬の念を抱いています。また、この事業はスタッフと制作関係の大人たちと協働しながら「本気で」取組むものでした。本気の人たちの姿をみると、青少年スタッフにとっても刺激になり、体験活動中の付加価値になっていたと思います。事業の目標を常に理解しあげてくださった方々へ感謝の想いでいっぱいです。これまで関わってくださった皆さんに、あらためて感謝申し上げます。

(公財) 京都市ユースサービス協会
京都市北青少年活動センター 所長
國府 宙世(ユースワーカー)

受験のためにはじめた高3のボランティア経験は、怒られた記憶しかありませんが、その頃に、チャレンジすることの重要性を先輩方に教えていただき、今があるように思います。その1年で出会った当時の職員さん、制作関係の方々などと20年以上のお付き合いを続けています。今や3児の父です。

今回もwebの方を担当させていただき、多くの皆様に読んでいただけたらと思います。LKありがとうございます。

Web制作: +13 齊藤 裕典

LIVE KIDSにはボランティアスタッフとして参加し、そして今回冊子のデザイン・編集として携わさせていただきました。LIVE KIDSの歴史や多くの想いが詰まった冊子に編集という形で参加できたこと大変嬉しく思います。編集にあたり当時を振り返ると、とにかく必死にがむしゃらに動いていたこと、毎週のミーティングが楽しかったことを思い出します。LIVE KIDSは一旦幕を閉じましたが、これから先のまた新たなはじまり、そして京都市ユースサービス協会の益々のご発展を願っています。

デザイン・編集: 吉田 明衣

出演者エントリー数
Music部門 8,462組 15,949名(第1回~)
Dance部門 816組 5,249名(第11回~)
Performance部門 4組 10名(第25回記念大会)
計: 4,282組 21,208名

ご来場者数 44,480名(第1回~25回記念大会)

運営

ライブキッズ青少年スタッフ(第4回~25回記念大会)
第4回 27名 / 第5回 82名 / 第6回 76名 / 第7回 87名 / 第8回 21名 / 第9回 55名 / 第10回 99名 /
第11回 99名 / 第12回 89名 / 第13回 78名 / 第14回 66名 / 第15回 52名 / 第16回 42名 / 第17回 43名 /
第18回 84名 / 第19回 88名 / 第20回 82名 / 第21回 87名 / 第22回 86名 / 第23回 48名 / 第24回 25名 /
第25回 Pre-event LIVEKIDS in 新風館 18名 / 第25回 Kick-off event 18名 / 第25回記念大会 54名
計: 1,146名

協賛企業・団体

㈱JEUGIA(第1回~25回記念大会) / ヤングジョブスポットデュラ(第15回~18回) / Fender U.S.A.(第16~18回) /
京都科学技術専門学校(第16~17回) / YTC 京都中央工科専門学校(第18回) /
学校法人京理学園 京都理容美容専修学校(第20回) /
京都精華大学ボーラーカルチャー学部(第23~24回) /
㈱ヘルスレボリューション(第24回) / その他多くの広告協賛企業の方々

助成

財団法人地域創造/芸術文化振興基金(第10回~11・15回) / 京都青少年ゆめネットワーク(第18回)

制作協力

㈱クリエイティブコンセプツ J音楽企画(第1回~7回) / ㈱JEUGIA J-コンサート企画(第8回~16回) /
㈱リュウ(第1回~25回記念大会) / (有)ティーフンドハイ(第1回~25回記念大会) /
㈱京都舞台美術製作所(第2回~25回記念大会) / ㈱教映社(第18回~25回記念大会) /
京都精華大学マンガ学部アニメーション学科(第20回~25回記念大会) /
オフィス・パニック(第1回~25回記念大会) / ㈱メディアプラン(第25回記念大会) / +18(第25回記念大会)

協力

α-station(エフエム京都)(第2回~5回) / ㈱J2mail(第10回~25回記念大会) /
近畿コカ・コーラボトリング㈱(第10回) / テレセン株式会社(第11回) /
ヨコハマスクールミュージックスクール実行委員会(第12回~20回) / 新風館(第14回~25回 Kick-off event) /
タウン情報ぱーる(㈱エヌ・アイ・プランニング(第15回~25回記念大会) /
Music Revolution大阪事務局(第18回) / 街ートファイターズ事務局(第18回) /
㈱ヤマハミュージックパブリッシング(第19回~25回記念大会) /
(公財) 京都文化財団(第20回~21回) / ㈱ソニー・ミュージックエンタテインメント(第25回記念大会) /

後援

α-station(エフエム京都)(第6回~25回記念大会) / J-PHONE西日本(第11回) /
(社) 京都ボランティア協会(第12回) / KBS 京都 / NHK 京都放送局 / 京都新聞 / 毎日新聞京都支局 /
読売新聞京都総局 / 朝日新聞京都総局(いずれも第12回~25回記念大会) /
C-radioFM滋賀 / 京都市教育委員会 / J-COM 京都みやびじょん(第18回~25回記念大会) /
BECひわ湖放送(第17回~25回記念大会) / 日本ストリートダンス認定協議会(第24回) /
京都リビング新聞社(第25回記念大会) / 人づくり21世紀委員会(第25回記念大会)

審査員

㈱JEUGIA 関係者 / α-station 関係者 / 新風館関係者 /
㈱ヤマハミュージックパブリッシング関係者 / ㈱ソニー・ミュージックエンタテインメント関係者 /
ネットワークユニットDUO主宰・舞台芸術コーディネーター 川南恵氏 / フィットネス・ダンスコーディネーター 吾妻亞紀氏 /
ダンスコレオグラファー&インストラクター 平山香代子氏 / キア-GEAR-関係者 /
ダンサー・コレオグラファー&インストラクター YUKIE 氏 / moca Dance&Pilates 主宰 土生清美氏 /
コロムピアミュージックエンタテインメント関係者 / ㈱京都放送カルチャーセンター関係者 /
㈱ボニーキャニオン関係者 / ㈱BMGファンハウス関係者 /
ヨコハマスクールミュージックスクール実行委員会関係者 / 中京青年の家ダンスインストラクターの方々

共催

もっと元気に・京都市民会議(第8~14回) / 公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団(第15~16回)

主催

公益財団法人 京都市ユースサービス協会 / 京都市 /
公益財団法人京都市国際交流協会(第1回) /
ライブキッズ実行委員会(京都市 / 京都市ユースサービス協会 / 健康都市づくり市民会議)(第4~7回) /
公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団(第17回~24回) /
ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)(第25回記念大会)

運営協力

青少年スタッフ支援委員(第21回~25回記念大会)

顧問 遠藤 保子先生を偲んで

(立命館大学産業社会学部 特任教授・名誉教授)

～Chance・Challenge・Change～

Chance (チャンス) をつかまえ
積極的に Challenge (チャレンジ) し
よりよい自分に Change (チェンジ)



故 遠藤 保子先生

1988年財団設立から理事として就任され、のちに専務理事、理事長、顧問として財団の運営にご尽力されました。

何よりこの事業の発案者、生みの親であり、25年の間大会委員長、審査員長として、LIVE KIDSのよき理解者として関わってこられました。

「このLIVE KIDSを京都で1番の若者の文化発信事業として、京都会館のメインホールで開催できるぐらいの大きな事業にしましょう!」と笑顔でおっしゃった事を今でも覚えています。毎年本大会を楽しみにしてください、ありがとうございました。

～Chance・Challenge・Change～の3つのCは、遠藤先生が大会の挨拶や職員入職式などで若い人へのメッセージとしてよく使われたステキな言葉です。

心より哀悼の意を表します。 2021年5月6日逝去(享年69歳)

(公財)京都市ユースサービス協会 理事・参与
小嶋 薫



発行者：公益財団法人 京都市ユースサービス協会
発行日：令和4（2022）年1月15日

公益財団法人 京都市ユースサービス協会
ライブキッズ運営事務局
<http://www.ys-kyoto.org/livekids/>

〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町 262
京都市中央青少年活動センター内
TEL: 075-213-3681 FAX: 075-231-1231
Email: office@ys-kyoto.org HP:<http://www.ys-kyoto.org>

○制作・編集：吉田 明衣・齊藤 裕典・國府 宙世・小嶋 薫

○Special Thanks : LIVE KIDSに関わった・寄稿いただいた全ての皆さん